

緒方貞子 —— 難民支援の現場から

取材・構成

東野真

Higashino Makoto



集英社新書

0199
A

東野 真(ひがしの まこと)

一九六五年生まれ。八七年、東京大学文学部卒業後、NHK入局。広島放送局、教養番組ディレクター等を経て、社会情報番組チーフ・プロデューサー。二〇〇一年制作のNHKスペシャル「難民と歩んだ10年」緒方貞子・国連難民高等弁務官」などで、NHKは国連報道賞最優秀賞を、また「テロはなぜ生まれるのか」緒方貞子 ニューヨークで語る」でギャラクシー奨励賞を受賞。著書に『昭和天皇二つの「独白録」』(NHK出版)がある。

緒方貞子おがたさだこ — 難民支援の現場からなんみんしえん げんば

二〇〇三年 六月二二日 第一刷発行
二〇〇三年 一月九日 第二刷発行

集英社新書〇一九九A

著者………東野 真ひがしの まこと

発行者………谷山尚義

発行所………株式会社集英社

東京都千代田区一ツ橋二一五一〇 郵便番号一〇一八〇五〇

電話 〇三—二三三〇—六三九一(編集部)

〇三—二三三〇—六三九三(販売部)

〇三—二三三〇—六〇八〇(制作部)

装幀………原 研哉

印刷所………凸版印刷 株式会社

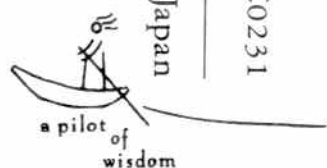
製本所………加藤製本 株式会社

定価はカバーに表示してあります。

© Higashino Makoto 2003

ISBN 4-08-720199-6 C0231

Printed in Japan



造本には十分注意しておりますが、乱丁・落丁(本のページ順序の間違いや抜け落ち)の場合はお取り替え致します。購入された書店名を明記して小社制作部宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取り替え致します。但し、古書店で購入したもののについてはお取り替え出来ません。なお、本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。



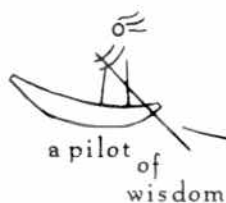
191937

日文 701602223

緒方貞子
——
難民支援の現場から



東野真
Higashino Makoto



京都大学人環・総人図書館

京都大学図書



1030530572

人環・総人図書館

集英社
新書

0199

目 次

◎序章……怒りを原動力にして

11

◎第一章……国連難民高等弁務官への道

19

難民との出会い／外交官と政治家の家系／

アメリカ留学と政治学／女性初の国連公使／

難民高等弁務官へ／UNHCRとは／難民の代表として

◎第二章……「冷戦後」の始まり——クルド難民

37

クルド難民の発生／歴史を変えた決断／小さな巨人

◎第三章……「民族浄化」の中で——旧ユーゴ紛争①

47

砲弾の下での支援／ボスニア紛争／現場職員の苦悩／

史上最大の空輸作戦／サラエボ市民を見殺しにはしない／
援助に対する妨害／人道援助のジレンマ／
進まない政治解決／国連が抱えるジレンマ

◎第四章……国際政治と人道援助——旧ユーゴ紛争②

援助停止事件／「ショック療法」の効果／
スレブレニツアの虐殺と Dayton 和平協定／
コソボ紛争の始まり／NATO 軍空爆の失敗／
国内世論対策に利用された「人道援助」／
「空爆」は解決策にならない／難民問題を解決するために

◎第五章……厳しさを増す人道援助——ルワンダ難民

大量虐殺が生んだルワンダ難民／
キャンプを支配する「虐殺の首謀者たち」／
孤立無援の戦い／翻弄される難民たち／
密林に消えた四〇万人を追って／狙われる援助職員の命／

平和維持機能の強化が必要／二〇世紀が終わっても

◎第六章……紛争地域の再生に向けて

憎しみを乗り越えるために／「共生」をめざす計画／

紛争の原因は社会の不正／

「現場主義」を貫いた一〇年／難民に尊厳を／退任

113

◎第七章……同時多発テロとアフガン難民支援

ニューヨークで目撃したテロ事件／

世界が見捨てたアフガン難民／タリバン政権幹部との交渉／

軍事攻撃だけでは解決にならない／

日本は何をすべきなのか／アフガン復興の先頭に立って

131

◎第八章……「人間の安全保障」に向けて

テロはなぜ生まれるのか／「人間の安全保障」とは／

保護とエンパワーメント／恐怖からの自由を求めて／

153

欠乏からの自由を求めて／日本の役割

◎終章……

イラク戦争、そして日本

イラクへの軍事侵攻／イラクへの先制攻撃は正当化できない／
アメリカはどこへ向かうか／イラクとアフガニスタン／
日本占領との違い／日本はシビリアンパワーの国／
これからは外交の時代

175

講演

緒方貞子『日本、アメリカと私——世界の課題と責任』

195

あとがき

216

参考文献

218

本書に寄せて

国連難民高等弁務官としての私の一〇年間と、その後のアフガニスタン復興支援などの活動について、NHKの東野真さんが一冊の本にまとめて下さることになりました。この本には、過去三年間に数回行われた私への長時間インタビューと独自の取材の成果がまとめられています。

私が難民高等弁務官をつとめた冷戦後の一〇年は、旧ユーゴスラビアなどにおける大規模な紛争や、それにともなう人道的な危機が繰り返された時期でした。その余波はいまも続いており、世界中で多くの人々が苦しんでいます。世界はまだ平和からほど遠い状況です。

こうした困難な状況のなかで、私や同僚たちがどのような決断を下していったのか。そのプロセスについて多くの関係者に取材し、他では得ることのできない証言を引き出して記録したところに、本書の大きな価値があると思います。

最後に収録していただいた講演は、四年前にワシントンで行ったものです。やや時期が古く

なると思いましたが、あらためて読み返してみても内容的に大きく外れてはいないと感じましたので、掲載のご要望に応じることになりました。この講演を行ったときに比べて、アメリカや日本の「内向き志向」はさらに強まっていると感じます。日米関係は、危険な時期に入ったのかもしれませんが。しかし、日本はアジアの経済大国として、今後とも健全な国際主義を堅持しなければなりません。世界の平和は、受け身で行動しているだけでは得られないのです。この歴史の転機にあって、本書をお読み下さるみなさまが世界と日本の将来を考えるための何かのヒントを得られるならば、私にとっても望外の喜びです。

二〇〇三年四月末日

緒方貞子

本書で使用する統計上の数字は、特に断りのないかぎり、UNHCRジュネーブ本部のウェブサイト、および『世界難民白書 2000 人道行動の50年史』（時事通信社 二〇〇一年）から採った。

序章 怒りを原動力にして



UNHCR / U. Meissner

「緒方さんの行動のもとになっているエネルギーは何でしょうか？」

「何だか知りませんがね……」

数秒の沈黙のあと、緒方さんは続けた。

「怒りかもしれないですね。何かうまくいかない、がっかりするよりも怒りが出てくるんですよね。何とかしたいと、こんなことは受け入れられません。それはいろいろな形でひどくなったかもしれませんね。これは承知できませんという気持ちですよね」

「それはやっぱり人権とかそういうことに照らしてという……」

「そんなに難しい話じゃないんです。何かに照らすんじゃない、実態がということ。この一〇年で私、癩癩かんしゃくもちになったのかもしれないけれども」

そう言う、厳しかった緒方さんの表情が不意に緩み、笑顔になった。

欧州国連本部など多くの国際機関が集まるスイス・ジュネーブの一角に、UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）の本部ビルがある。一九九五年に新築されたばかりの瀟灑しょうしゃで近代的なビルだ。中央に巨大な吹き抜けがあり、透明な天井からは陽光がビル全体に降り注ぐ。まる

でどこかのリゾートホテルかと思われるような洗練されたオフィスである。ここが世界の難民支援のいわば司令塔だ。

私たちがここを初めて訪れたのは、緒方さんの任期が終わりに近づいた二〇〇〇年一〇月のことだった。国連難民高等弁務官として活躍した緒方貞子さんの一〇年間を記録するドキュメンタリーを制作するのが目的だった。

いま世界は史上空前の大量難民時代を迎えている。その数はおよそ二〇〇〇万人（二〇〇二年一月一日現在）。これは、オーストラリア一国の人口に匹敵する数字である。

冷戦終結後、世界中で噴き出した民族対立や内戦は、現代史上類例のない困難な難民問題をつくり出してきた。クルド、ボスニア、ルワンダ、チェチェン、コソボ、東ティモール、アフガニスタンなど、数え上げればきりがない。その多くは国家間の戦争ではなく、国内紛争に起因するものである。民族や宗教の対立から生まれた紛争は、隣人同士の凄惨な殺し合いを生み出し、多くの人々を「強いられた移動」(forced displacement)に駆り立てた。国境すら越えられずに苦しむ人々も多い。冷戦が終わったとき、誰がこれほど悲惨な未来を思い描いたのだろうか。

この未曾有の一〇年、難民を支援する国連機関のトップ・国連難民高等弁務官をつとめてきたのが、緒方貞子さんである。緒方さんは、これまでの常識をうち破って、新しい難民支援の

枠組みをつくりあげた。その卓越した手腕と見識は海外で高く評価されている。日本国内では、アフガニスタン支援政府代表となってからむしろ有名になった感があるが、海外での名声は過去一〇年のたゆみない活動から生まれたものである。

ジュネーブで取材中、UNHCRの執行理事会に集まった各国の大使にインタビューを求めると、先進国・途上国を問わず緒方さんの退任を惜しむ声が返ってきた。わざわざカメラの近くに来て自分も何か話したいという人もいる。ふつうの取材では経験しないことだ。

アフリカ・ウガンダの難民担当大臣はこう言った。

「任期中に三一回もアフリカを訪れた高等弁務官が過去にいたでしょうか。後任の人がこの記録を破ってくれることを願っています。緒方さんは、たとえ政治的問題であっても、難民の命がかかっていると知ると躊躇ちゆうちゆうなく大胆に交渉する人でした。私たちにあって、緒方さんはいつも『そこにいた』のです」

いつも、そこにいた。それはまさに、難民高等弁務官としての緒方さんの姿勢そのものを表す言葉である。

緒方さんに聞いてみたいことはたくさんあった。私たちは事前に一〇時間分のインタビューを申し込んだが、許可されたのは四時間、しかも四回に分けて二、三週間おきに一時間ずつと

いう形だった。それでも破格の条件であるという。もう少しだけ、と食い下がる私たちにアシスタントの女性が説明してくれた日程表は、世界のフィールドを飛び回るスケジュールでびっしりと埋まっていた。

インタビューの場所は、建物の最上階にある執務室の隣の応接室。一〇月九日、ベージュ色の上品なスーツを身にまとった緒方さんは時間どおりに現れた。取材の意図を説明し、撮影への協力をお願いすると緒方さんはこう言った。

「よく記者の方に頼まれるんですよ、エプロンを着けて台所に立っている姿を写真に撮りたいって。そういうのはすべてお断りしているんです。でも仕事のことはお話ししますから、何でも聞いてください。事前に項目をいただければ、少し調べて記憶を整理しますから。私だけでなく、ほかのスタッフからもよく話を聞いてください」

分刻みのスケジュールをこなす緒方さんの言葉には無駄がなく、それでいて冷静だった。取材の質を見定めるような厳しさも感じられた。

私たちはプライベートな取材を行わないことを約束し、彼女の一〇年間について順を追って尋ねていった。冒頭の場面は、こうして実現したインタビューの四回目、緒方さんの退任直前の一二月のときのものである。

怒りが原動力であるという緒方さんの言葉は、強烈な印象となって私の中に残った。